Ⅰ．平成６年度事業概要

1．全体概要

平成6年度に実施した発掘調査は5事業・9遺跡、整理・報告書作成は9事業・9遺跡、報告書作成冊数は7冊であった。

発掘調査の総面積は73,750㎡となり、昭和60年4月の本センター発足以来、最大の面積となった。これは、平成4年ごろから東海北陸自動車道の用地買収がすすんだことによるもので、同自動車道関連の調査面積は、平成4年度の7,860㎡から平成5年度には40,501㎡、平成6年度には60,000㎡と急速に増大した。

この結果、これまでに県下全体に分散していた調査遺跡は、幡豆郡幡豆町鳥羽城跡を除けば一宮市・葉栗郡木曽川町の東海北陸自動車道関連遺跡、稲沢市・中島郡平和町の一色青海遺跡、西春日井郡清洲町の清洲城下町遺跡など尾張部に集中する結果となった。

調査課は、昨年度38名に対して1名増の39名の体制となり、これも本センター発足以来の最大の人員配置となった。また、平成7年度には今年度以上の調査事業量が見込まれることから、10月に職員の採用試験を実施し、増員に対応することとした。

整理・報告書作成は、調査後数年間かけて作成する朝日遺跡に代表される大型の報告書が終了し、今年度から調査の翌年度に報告書を作成するという基本的なスタイルが可能となった。一方、単年度に報告書を刊行させるために、報告書刊行の詳細な計画の作成とその実行が求められた。しかし、年度上半期に発掘現場をかかえ、下半期に調査報告書を作成する工程を組まざるをえない調査研究員もいて、今後、報告書作成の作業環境への配慮や年間の報告書作成工程の見直しが必要にせまられている。

2．発掘調査

発掘調査を実施した9遺跡のうち、清洲城下町遺跡の清須城本丸地点から『清須村古城絵図』に描かれている内堀と推定される遺構を検出し、堀の内部から部分的に石垣の最下段の巨石と裏込めの石及び金箔瓦を含む多量の瓦が出土した。今後、遺構の検討や瓦の編年作業などによって清須城にかかる研究が大きく進展することになろう。また、遺物としては、大毛池田遺跡から出土した「美濃」の刻印須恵器2点・「天文八年」の紀年銘の木簡、門間沼遺跡より出土した古墳時代後期の琴などが注目される。

（1）弥生時代・古墳時代

大毛池田遺跡からは昨年度に続き、古墳時代前期の水田遺構を検出し、その広がりは南北230m、東西150mにもおよぶことが判明した。また、大畦畔による大区画の中に小畔による小区画が存在することや大畦畔には水口の構造が認められることなど水田の構造が明らかになった。

門間沼遺跡は古墳時代を中心とする遺跡であることが判明し、古墳時代前半期には竪穴建物・井戸・掘立柱建物・溝、後半期には掘立柱建物・井戸・古墳の周溝を検出した。検出した4基の古墳はいずれも5世紀末から6世紀中ごろの円墳と推定され、一部の古墳周溝から確認された土坑は溝内埋葬の可能性もある。また、古墳時代後期の溝から県内ではこれまでに出土例のない板作りの琴が出土した。

（2）古代

大毛池田遺跡から2点の刻印須恵器が奈良時代前期の遺物とともに平行する溝の下層からそれぞれ出土した。1点は杯内面の中央よりに「美濃」と刻印され、他は杯蓋片の裏面中央寄りに「濃」の1字が認められる。大毛池田遺跡の性格を考える上で貴重な資料となるであろう。

大毛沖遺跡は、今年度に約20,000㎡の発掘調査を実施したことから、遺跡の全体像を把握することができた。遺跡の中央部には旧河道が流れ、古代前半にはその流れが認められるが、後半には湿地化したと推定することができた。旧河道右岸域では全体に遺構が稀薄であるのに対して左岸域では住居跡が確認され、遺跡の中心地と想定される。また、旧河道からは県内では出土例のない平安時代後期の木製鐙や鉄製羽釜が出土し、遺構との関連性が今後の問題となる。

（3）中世

大毛池田遺跡から南北が長さ120ｍ、東西が確認している部分で長さ80ｍの溝により区画された方形居館と推定される遺構を検出し、区画溝の埋積後に掘削された方形池の最下層から大量の土器とともに「天文八年（1539）」の紀年銘のある木簡が出土した。今後、方形居館の構造や時期など文献資料や紀年銘木簡と関連させながら解明していかなければならない。

鳥羽城跡は、文献史料が乏しく城の時期や城主など不明な部分が多く、発掘調査に期待がかけられたが、城の時期を決定できる遺物を確認することができなかった。しかし、城の喰い違い虎口・搦手・土塁・曲輪など中世の山城の構造を明らかにすることができた。

（4）近世

清洲城下町遺跡では、昭和59年から継続して発掘調査が行なわれ、清洲城下町の復元がすすんでいるが、清須城本丸付近では、ほとんど調査が行なわれておらず、構造等不明の部分が残されていた。今年度の調査地点は本丸推定地にあたり、『清須村古城絵図』に描かれている本丸東側の内堀と推定される遺構を検出した。また、堀の内部から石積の遺構と考えられる石垣の最下段の巨石・胴木・裏込めの石が確認され、軒瓦、平瓦に混じり金箔瓦や鯱瓦も出土した。今後、堀、石垣、建物など遺構の検討や瓦をはじめとする遺物の整理によって、清須城の姿が見え始めると思われる。

3．調査報告書作成・調査研究活動

今年度は7冊の調査報告書と『平成6年度年報』・『埋蔵文化財情報9』を作成した。報告書は昨年度の朝日遺跡や松河戸遺跡などの大型の報告書が終了し、今年度の報告書は調査終了後1～2年で整理を終えたものである。

『川地遺跡』は、大正11年に清野謙次氏により調査が行なわれ、26体の人骨が出土した学史上著名な遺跡である。報告書では埋葬人骨に共伴した獣・魚骨製の首飾りや石器のなかでも大量に出土した礫石錘や粗製剝片石器が注目される。『牛ノ松遺跡』では県内では珍しい旧石器時代から縄文時代の遺物や中世の集落を囲む溝から出土した宋三彩・墨書土器が報告された。『刀池古窯跡群』では報告書作成中に行なわれたシンポジウム「中世常滑焼をおって」で示された新たな編年をもとに、遺構・遺物の検討を行なっている。『島田陣屋遺跡』では17世紀初頭から明治初年まで置かれた2,000石の旗本島田氏の陣屋の構造が明らかされ、さらに、下層から検出した弥生時代後期の竪穴住居・方形周溝墓と

出土遺物は豊川上流域の弥生時代集落の研究に貴重な資料となった。近世の城館関係の報告書として、『清洲城下町遺跡Ⅴ』、『名古屋城三の丸遺跡Ⅴ』、『吉田城遺跡Ⅱ』がある。『清洲城下町遺跡Ⅴ』では江戸時代清洲宿場町期の美濃街道の変遷や町屋構造を復元、『名古屋城三の丸遺跡Ⅴ』では名古屋城三の丸の各屋敷において歴代居住した人々の研究、『吉田城遺跡Ⅱ』では溝・土坑・井戸などから6～7軒の武家屋敷を推定した。いずれも、近世の陶磁器類の分類・計測・統計処理が行なわれており、今後、データの蓄積と比較検討により精度の高い分析が可能となる。

『平成6年度年報』には、新任職員の意欲的な取り組みにより調査研究編として10本の論文を載せることができた。今後も、多くの調査研究員により質の高い論文が掲載できるよう努力していきたい。

4．普及・啓発活動、その他

埋蔵文化財展及び講演会は、稲沢市勤労福祉会館を会場にして実施した。埋蔵文化財展は「尾張のクニ・國・藩（くに）」をテーマとして、朝日遺跡、尾張国府跡、清洲城下町遺跡、名古屋城三の丸遺跡など尾張の政治・文化の中心地の調査成果を展示解説した。8月16日から9月6日までの14日間に1600名余の入場者があり、埋蔵文化財への関心の高さをうかがい知ることができた。講演会は三重大学八賀晋教授により「国府と国分寺」について最近の調査成果を交えながら話をいただいた。また、新たな試みとして「尾張国分寺を考える」をテーマにミニ・シンポジウムを開催し、尾張国分寺の重要性を再確認した。

基礎研修会及び専門研修会は、市町村からの参加が少ないという反省から、研修内容を検討し、基礎研修会では発掘現場において土層剥取りの実際を、専門研修会では「中世集落の研究」をテーマとして内容を組んだ。特に、専門研修会は一宮市田所遺跡に焦点をあてながら、広瀬和雄氏による「畿内の中世集落」、橋口定志氏による「東国の中世居館」、下村信博氏による「文献史料からみる中世集落」などの講義により、さまざまな角度から中世集落の解明にせまった。いずれの研修会にも40名以上の参加者があり、本年度の研修会はまずまずの成果を得ることができた。次年度以降もさらに内容の工夫と充実が求められている。

現地説明会は調査工程の都合や遺構の散漫さなどから幡豆郡幡豆町鳥羽城跡と葉栗郡木曽川町門間沼遺跡の2遺跡の実施にとどまった。鳥羽城跡では本センター初の山城の現地説明会となり、250名の参加者は三河湾を一望することができる標高33ｍの主郭にあがり、戦国時代への想いを満喫した。また、門間沼遺跡の現地説明会では県下初出土の琴を公開したことから、参加者が700名を超すこれまでにない大規模な現地説明会となった。